

『月報』500号発刊記念号

目 次

I. 『専修大学社会科学研究所月報』500号によせて

- “継続は力なり” …………… 所長 柴田 弘捷 …… 2
- 『専修大学社会科学研究所月報』は不滅です…………… 儀我壮一郎 …… 4
- 『月報』創刊号の思い出…………… 加藤幸三郎 …… 6
- 『社研月報』の500号によせて…………… 麻島 昭一 …… 7
- 『社研月報』－思い出と小さな注文…………… 森 宏 …… 9
- 21世紀の社会科学研究所の活動は？…………… 福島 義和 …… 11
- ゲーリッツ・スコルジェッツとEU東方拡大…………… 加藤 浩平 …… 12
- “月報500号と私…”…………… 黒田 彰三 …… 15

II. 月報401号～500号の総目録と索引

- 「専修大学社会科学研究所月報」目録…………… 16
- 「専修大学社会科学研究所月報」の執筆者索引 (50音順)…………… 26

- <編集後記>…………… 28

“継続は力なり”

社会科学研究所長 柴田 弘捷

『専修大学社会科学研究所月報』（以下、『月報』）は、本号（2005年2月号）をもって500号となります。『月報』は、1963年10月1日付けで第1号が刊行されていますから、それ以来営々42年間にわたって、定期的に（いくつかは「合併号」としたものもありますが）刊行されてきました。

この間の『月報』には、研究ノート、調査報告や資料紹介、「聞き書き」、100枚以上になる「完成」論文等々、多様な内容を持ったものが掲載されてきました。なかでも「聞き書き」は、長年社研の活動に積極的にかかわってこられた所員の定年退職時に、これまでの研究生活を中心に振り返っていただいたもので、そこには先生の研究への態度、研究の軌跡だけでなく「時代」が見えます。それは、社会科学が「現実科学」であり、「時代」とは無関係でありえないことを、私たちに見せてくれるものになっています（若い研究者の方には是非読んでもらいたいものです）。

近年は、社研が行う春と夏の合宿研究会の報告号を出すようになりました（そこには、論文もあれば、見学記・感想も含まれている）、また、昨年から定例研究会での報告の概要も掲載され、社研の活動状況が『月報』を見れば分かるという、広報誌的役割も見られるようになりました。

執筆陣も、所員のみならず、研究参与（社研OB）、特別研究員（博士課程の大学院生）の論考も増え、また、定例研究会、グループ研究の研究会、合宿研究会等での所員以外の報告者の報告論文も掲載されるようになり、多様になってきています。

『月報』の性格、というより所員の認識、については、これまで多様であったようです。当初『月報』は「不完全主義」（創刊時の社研事務局長・現所外研究員・長幸男氏の造語といわれる）を標榜していました。長氏は後年、その意図したところを次のように述べています。「つねに不完全の危険をおかして仮説にいどむことこそ（既成の解答や結論をくりかえすことだけでなく、『問題提起』をしつづけることこそ）学問研究の真の在り方ではあるまいか。『心安く』小論文を誰もが発表できる場が月報であるし、それが社研の志を最も端的に物語る活動であったように思うのである」（長幸男『『月報』136号P.15』）。そしてそれは「社研活動の一つの特徴」と評価されていました（『専修大学 社会科学研究所四〇年史』P.30）。

私が社研所員に入れていただいた頃（1970年代後半）には、ややこの「不完全主義」の性格は衰え、「完成主義」の色彩が強くなったようです。そのためか、毎月の執筆者の確保に困難を

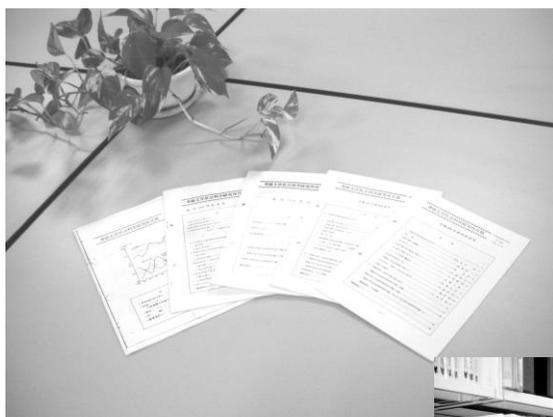
きたすような時期があり、『月報』は「完成」した論文でなくてもよく、研究ノートでも良いのだから、気軽に執筆してもらおう、という議論が事務局会議でなされた記憶があります。

そして現在は、上述のように、執筆陣も内容も多種多様になってきています。

現在の『月報』のあり方（といっても「性格」らしきものはあまり見えてきません）が悪いというわけではありませんが、初心の「不完全主義」を改めて想起し、所員、研究参与、特別研究員、所外研究員、そして社研の活動にかかわってくださった外部の方々、問題提起的な研究ノートを含めて「心安く」と発表でき、それをめぐって学問的な議論ができる場、「間違っただけでも平気で言い合って、その話し合いの中から真実なものをお互いに見つけだしてゆけるような雰囲気」（長 前出）の場にもなれば、と感じています。

ともあれ、500号もつづいた『月報』は、「社研の宝」といっても過言ではないでしょう。今後も『月報』が途切れなく刊行し続けていけることを願ってやみませんし、それに向けて一層の努力が要請されていることを痛感しています。

最後に、これまで『月報』の刊行を維持し続けてこられた歴代の編集担当をはじめとする社研事務局員諸兄姉の努力に感謝の意を記しておきます。ありがとうございました。



『月報』1、100、200、300、400号の表紙

書棚に並んだ『月報』（1～499号）



『専修大学社会科学研究所月報』は不滅です

研究参与 儀我 壮一郎

I 『月報』の海外視察特集号のこと

恒例となった社研の2年に1回の春季海外視察は、次のような歩みです。『月報』は、毎回、特集号で視察と学术交流の成果を発表してきました。

- ① 1993年：韓国（麻島昭一団長）。
- ② 1995年：中国（北京、上海、麻島昭一団長）。
- ③ 1997年：ベトナム（ハノイ、ホーチミンなど、水川 侑団長）。
- ④ 1999年：中国（香港、深圳など、水川 侑団長）。
- ⑤ 2001年：中国（北京、大連、古川 純団長）。
- ⑥ 2003年：中国（雲南省麗江、昆明、古川 純団長）。
- ⑦ 2005年（予定）：中国（北京、柴田弘捷団長）。

幸いに、私は第1回から第6回まですべてに参加し、第7回にも参加の予定です。毎回、『月報』に、報告・雑感を発表してきたので、執筆者としての私の『月報』との関係は、この海外視察が中心です。顧みれば、父の儀我誠也（当時陸軍少佐）が、1928（昭和3）年6月3日から4日にかけて、軍事顧問として張作霖と同じ車輻に乗車していたため、4日未明の河本大作大佐を首謀者とする列車爆破のさいに九死に一生を得たという経過があります。その前に、家族は、父より一足先に奉天（現：瀋陽）に引きあげることとなり、私は、北京の日本人小学校から奉天の日本人小学に転校していました。翌1929年1月、父とともに帰国し、広島済美小学校（後に原爆の爆心地）に転校しました。父は1938年1月、天津特務機関長在職中に急死、私は新潟県立高田中学校の五年生で、旧制四高の受験、入学の直前でした。このような経験もあるので、中国への海外視察には、特別な思い入れがあります。『月報』の各特別号の私の小論の底流に、このような「歴史的背景」があることを、今、まとめて「註記」させていただきたいと思います。

II なつかしい社研、なつかしい『月報』

私は、戦時中に東京帝国大学経済学部経済学科を1943（昭和18）年9月に卒業。演習（ゼミ）は大河内一男先生（当時助教授）に指導していただきました。氏原正治郎、塩田庄兵衛両君たちも同学年のゼミ生で、江口英一氏は先輩格でした。

敗戦後、東京帝国大学経済学部教授との兼任であった専修大学大河内一男学長（1946年4月

専修大学経済学部長、1947年12月学長、1949年3月退任。後、学監）当時に、すでに「社会科学研究所」が存在していたというので、私は社研に対して特別の親近感をもち、1985年から89年までは運営委員、90年からは研究参与となるなどしながら、現在にいたりました。ちなみに、大河内学長は、1948年6月、今村力三郎総長のもとで労働学院も作られました。歴代の社研所長である①大河内一男、②小林良正、③山田盛太郎（再建の指導者）、④小林義雄、⑤石渡貞雄、⑥江沢譲治、⑦大友福夫、⑧三輪芳郎、⑨麻島昭一、⑩泉武夫、⑪水川侑、⑫古川純、⑬柴田弘捷 各氏と事務局長、部長、運営委員をはじめ、多くの所員からの学問的刺激は、思い出せないほど多面的・多角的ですが、『月報』と『年報』を読めば、各所員の面影と鋭い論点が生き生きとよみがえります。

その『月報』がいよいよ500号を数えます。堂々たる快挙です。1963年から2005年の現在にいたる40年以上の歴史的な大転換期の日本と世界の理論と現実、また、所員の迫力に満ちた「自分史」ともいうべき「聞き取り」による特集号の内容のどちらも、同時代人である私を励ます不思議な力をもっています。毎号待ち遠しい『月報』のますますの充実と、理論的・現実的な指導的役割の発揮を、切望してやみません。

『月報』創刊号の思い出

研究参与 加藤 幸三郎

いま、(発行者 山田盛太郎)「No.1」(1963・10・1)と記された『月報』を前にして、いろいろな感慨がよぎる。

冒頭〔再発足記念の会〕では、当時の相馬勝夫学長の「挨拶」が掲載され、続いて山田先生の「再発足の経緯」が収録されている。いわゆる「高度成長期」を背景に「社研再発足の位置が規定される」とし、もともと社研は、昭和24年の創立にかかわり、その後休止状態にあったが、『小林良正博士還暦記念論文集』執筆の陣容の中に、「共同的な研究事業に対する自覚と自信とが培われることになり、自然発生的に一つの研究集団が形成されてきた。その起動力をなしたものは、寧ろ、若い研究者層であった」と。初代事務局長の長幸男さんも「構造研から社研再発足へ―事務局の弁―」を、それに吉沢(会計)、玉垣(資料)、山田克巳(統計)、望月(購入)の分担であった。

さらに、江沢譲爾先生の「工業集積の形態と理論」なる、現在でも高い評価が与られている論考が掲載され、また「専修大学社会科学研究所の部門構成」も規定されている。そして、最後に、新米の私が「編集後記」を書いているのである。

ところで、『月報』で最初にして最後(?)というのは、言いすぎとしても、この『月報』冒頭のページに「グラフ」が収録されている。さきの「高度成長期」を示現するものであるが、これは「切抜」担当の森田桐郎氏の作成にかかわる。どういう経緯であったか思い出せないが、森田氏らしい発想とおもう。話はとぶが、1990年代だったろうか、社研で早朝の「東京魚市場」見学実施の前夜の懇親会に、珍しくひょっこり森田氏が現れた。久闊を叙したわけだが、その後、森田氏は「腎臓透析」の手当ても空しく逝かれた。

ともあれ、大学の応援や山田先生の指導力で、社研活動一ひいては「月報」編集も軌道に乗るわけなのであるが、遅速や厚薄はあれ、コツコツと「500号」まで継続してきたのは、歴代の社研事務局の努力の結晶というべきであろう。「身近か」で、手っ取り早く投稿出来る強みも見逃せまい。事務局の地道な努力を今後期待して「お祝いの言葉」としたい。

『社研月報』の500号によせて

研究参与 麻島 昭一

『社研月報』が500号に達するという。めでたいことである。創刊号が1963年10月であるから、これまでの存続期間は41年3カ月という計算になる。思えば随分と長い間よく続いたものだと感慨深いものがある。

第100号記念号は1972年1月、江沢譲爾、石渡貞雄両氏の「寄せて」と小林義雄「発足前の社研の思い出から」、「小林良正先生を囲んで」（聞き手加藤幸三郎、森川喜美雄、殿村晋一 3氏）が掲載され、第200号記念号は1980年4月、大友福夫「研究媒体としての『社研月報』」、池田博行「よせて」、社研の年報・月報の目録と執筆者索引が掲載され、第300号記念号は1988年7月、三輪所長はじめ10名の寄稿があり、月報201～300号の総目録と索引が掲載されている。のち『社会科学研究所40年史』を編纂したとき、これらの節目に掲載された「思い出」が役立った。

そして400号(1996年10月)の節目には、なんと拙稿「戦前期昭和電工の財務」が掲載されている。当時、投稿した私は、校正段階で初めて400号であることに気付いた。「いい番号だな」と思ったが、それ以上のことは浮かばなかった。今思えば、もっと喜ぶべきであったと後悔する。私ばかりか、当時の編集担当も節目であることに意義を感じなかったようである。400号の番号を貰って発行が済んだ後、私は節目の番号を個人論文で使ってしまったのかな、とこそばゆく思うようになった。おそらく『月報』は今後も延々と続くであろうが、節目の一つ400号だけは非記念号であることが歴史に残ったわけである。

もう一つの思い出は、前掲『40年史』編纂にあたって、古参の先輩所員による座談会を開き、社研活動を回顧していただいたが、『月報』に対する思い入れの強さを知ったことである。初期の『月報』では「不完全主義」を反映して、気楽に書き、長文でないものが多かった。まだ発想段階のもの、議論を吹っかけるもの、自由に一寸書いてみる、そういう「不完全」が許される場として月報利用が意識されており、それへの郷愁が感ぜられたのである。時代が下がるにつれ、『月報』の内容は変化し、完成した論文が主流となっている。今でも、紀要よりも早く掲載されること、発表の場が少ない若い研究者へ門戸を開くという点はある。確かに現在の入稿から発行までの期間は非常に短く、よい印刷業者に恵まれている。

ただ、『月報』にもアキレス腱はある。初期から執筆遅延、途中下車、刊行遅延が発生、定期発行に苦しんだ模様である。不定期発行が日常茶飯事の時期もあった。編集担当はさぞ苦勞したと想像される。私が所長時代にも原稿不足がしばしばあり、編集担当は毎月の定期発行維持

に苦勞しておられた。他の研究所を見ても、たいていは「所報」であって年間発行回数は少なく、「月報」は社研と人文研だけだった。「月報」を謳う以上、年間12回の発行を維持せざるを得ず、原稿集め、刊行管理も大変である。それを見かねて、私は毎月発行にこだわる「月報形式」をやめて、不定期発行も可能な「所報形式」にしたらどうかと、事務局内で提案したことがある。どんな議論をしたか忘れたが、結局、うやむやに終わって変更はしなかった。もし「所報形式」に踏み切っていたら、今頃、まだ500号には達していなかったかも知れない。毎月発行の義務感がなくなると、発行はルーズに流れ、回数の落ちる可能性が高い。もちろん反対に原稿が多くて、年間12回を超える盛況が実現したかも知れないが、多分そうはならなかっただろう。嫌な言い方であるが、「月報形式」の維持が定期発行の努力を呼び起こし、『月報』を通じての研究活動の歴史を支えてきたことになる。今の私はやはり変えなくてよかったと反省している。

現在、私は「研究参与」の末席を汚しているが、研究参与にも年報・月報の執筆の場が用意されている。時折、ご厄介になって感謝しているが、600号までは無理として、もう少しの間だけお世話になりたい。『社研月報』の一層の発展を祈る次第である。

『社研月報』一思い出と小さな注文

研究参与 森 宏

70年代末6月の所員総会で、「研究会担当はいったい何をしていたんだ」と激しく詰問された。無理もない、前年度の定例研究会はたった一回しかなかったのだから。多い時は一ヶ月に二つも三つも重なることがある昨今の事情からは想像もつかないことだろう。出席者の1人が、「入所間もない人間に研究会をやらせても、誰がどんな研究をしているのかまだ分らないのだから」と庇ってくださり、事なきを得た。謙虚に反省し総会後は、キャンパスや職員バスの中で人の顔を見れば、闇雲に「何かやりませんか」と声をかけ、次の年の総会は無事であった。恐らくその次の年度、編集担当をおおせつかった。『月報』は5-6ヶ月遅れで、『年報』も実際に出るのは夏休みにずれ込むこともあった。何とかしなければならなかった。研究会担当で培った闇雲の押しで、誰かれとなく声をかけ、いったん「何か書きましょう」の言質を取るや、毎週のように督促を繰り返した。

ある年の所員総会で、別の所員から「今度の編集担当は横柄である。第一催促の仕方が悪い。女房にまで督促するのだから」と詰られたことがある。しかし待ってください。10月中旬締め切りの年報原稿が、12月はじめになってキャンセルされたり、「あと2週間」、今度は「来週末」の繰り返して、正月を越そうとしていたのですから。言い返したかったが、編集長非難の声に事務局長も同感の様子だったので、謝ることにした。今でも口惜しい思いである。

編集は結構長い間やらせていただいた。所員一同の協力というより、編集担当の作り笑いと強引な押しに「負けてくださった」数人の所員のおかげで、程なく『月報』も『年報』も期限内刊行にこぎつけることになった。その後は編集担当の努力というより、全学的な研究の充実と所員の投稿機運の高まりから、月報にはもったいないような密度の高い原稿が集まるようになっていく。ご同慶の至りである。

『社研月報』のいい点は、何よりも早いことである。経済学部『論集』は、定年前に亡くなられた加藤佑治氏のご尽力で、年に3号出るようになったが、原稿提出から刊行まで、おそいときは半年近くかかることがある。年2号の場合はもっとかかるだろう。『月報』の場合は著者1人の努力次第で、時に3校まで見ても、一ヶ月以内であがる。しかも用紙・印刷がともに美麗である。欧米のジャーナルに出すと、査読者のコメントが返ってくるのが半年後、リライトして幸いアクセプトされても、原稿提出から刊行まで2-3年かかるのは珍しくない。学会で点数を稼ぐ気のない人間には、本研究所『月報』はとても有り難いアウトレットである。

とは言っても、わが『月報』のあり方に、もう少し何かがあっても良い。その一つは、レフェ

リー査読ではないが、編集者が、できれば機械的な持ち回りでなく、専門に近い方が初校よりむしろ原稿の段階で目を通して、気付いた箇所をコメントするくらいのことであってもよいのではなかろうか。以前と違い原稿用紙の手書き原稿でなく、ワープロ打ち出し原稿なら、印刷初校と変わらない。古くからタイプ原稿が普通であった欧米の大学や研究所では、どこかに出す前に仲間内のレビューが慣行的になされていた。

大分以前、NZ留学から帰国して、雑文を書かせていただいたが（『月報』No. 353）、1年間のNZ生活でかなりフラストレーションが溜まっていたので、副題「Does a Kiwi Need a Vacation?」「芯のあるごはん」からも窺えるように、内容はかなりNZに批判的で、過激な言葉が使われていた。その時の編集担当者は、遠慮がちに幾個所かを指摘してくださったが、そのコメントを受け入れたことで、後から読み返してみると、一般の読者にはずいぶん読み易くなったのではないかと感じられる。

2-3年前に柄になく、O. J. 裁判の「無罪」判決について私見を書かせていただいた（『月報』No. 473）、その時の編集担当者は、幾箇所かの明らかなミスは指摘してくださったが、ご本人が納得できない箇所は、後記に一言二言遠慮がちに述べただけであった。後に本にして大学以外の知人にも読んでもらったところ、同じような疑問を感じられた人が少なくないのを知った。もう少し説明を加えておけば、読者全員ではないにしろ、私の言いたかったことに対する疑念は少なからず解消するはずであった。この正月に実の兄から、「1-2行そのことが書かれてあれば、もっと抵抗なく読めたのに。結構多くの方が僕と同じような疑問を感じたと思うよ」の小言ももらった。

特定の論文をあげるのは適切でないかもしれないが、昨年、米国のニューイングランド地域の「まちづくり」に関する実態調査の報告が載った。ニュージャージー州には親しい知人がおり、以前ラドガス大学で市街地周辺の農地転用の勉強をしたいと思っていただけだから、早速興味深く読ませていただいた。しかしその論文のどこを読んでも、私程度にあの地域に土地勘のある人間でも、その町のロケーションがはっきりしない。ニューヨーク市起点の簡単な地図が一枚添えてあったならば、理解はもっと深まったと思われる。専門家の間では有名なところで（そのために調査に出かけた）、つつい他の人も知っているに違いないと想定されたのであろう。地名に限らず分析上の概念に関しても、自分たち仲間の常識は他の人の常識と思いがちである。

誤解のないように繰り返すが、査読者のコメントに「きちんと対応して修正しないと」（『農業経済研究』76 巻3号「編集委員会だより」）掲載に至らないと言うのではない。ほんの仲間内の感想程度で、聴くもよし、聴かずともよしなのである。

21 世紀の社会科学研究所の活動は？

所員 福島 義和

社会科学研究所が正式に発足したのはちょうど私が生まれた年（昭和 24 年 4 月）である。つまり 55 年の歴史があるわけである。この間、社研の活発な活動は表に見られるとおりである。

昭和 20 年代後半から昭和 40 年代後半までは、科研費の助成や他大学の教員とも協力しつつ共同研究あるいは特別研究が実施されている。昭和 40 年代後半は京浜京葉工業地帯の総合調査などの実態調査が活発に行われている。山谷の実態調査もこの頃である。昭和 49 年にはその成果が社会科学年報（第 8 号）に『日雇労働者—山谷の生活と労働—』（未来社）として出版されている。そして昭和 50 年代後半からは三輪体制において社研プロジェクトが次々と継続的に展開されている（詳細は表を参照）。

しかしこれらのプロジェクトが行き詰まりをみせ始めるにともなって、現在の特別研究助成や共同研究に社研の活路を見出そうとしたのが実態であろう。ある意味では研究の細分化といった背景があることも確かである。そのような中で平成 16 年度にスタートした柴田所長を中心とした中国研究が久しぶりに社研プロジェクトとして復活してきたのである。

大所帯になった社研で、大きなプロジェクトを成功させるには色々な困難を伴うが、研究会担当の一人として所員の積極的なご参加を切に希望します。

表 社会科学研究所の研究活動の流れ

S28	●	日本の労働者の質的構造の研究	
S29	●		
S35	●	昭和 25 年から 30 年における日本資本主義の再生産構造と権力体系	
S36	●		
S37	●		
S41	●	日本「近代化」における帝国主義の成立と「解体」＝再編に関する基礎的研究	
S42	●		
S43	●		
S44	●		
S45	●		産業構造の変革とそれに伴う諸問題
S46	●		
S47	●		
S48	●	京浜京葉工業地帯の総合調査を開始	
S57	●	市場機構と政府・公共部門の役割	
S58	●		
S59	●		
S60	●	ハイテクノロジーと社会科学	
S61	●		
S62	●	日本産業の「空洞化」問題	
S63	●		
H 1	●	転換期の世界と日本	
H 2	●		

出典：専修大学『自己点検・評価年次報告書（2004 年度）』および専修大学社会科学研究所（1993）『専修大学社会科学研究所 40 年史』より筆者作成

ゲーリッツ・スコルジェレッツとEU東方拡大

経済学部教授 加藤 浩平

月報紙面が重厚な論文によって独占されるようになって久しいが、以前より、もっと気軽に掲載できる短いエッセー風の論考も載せるべきだという意見があった。そこで無謀にもこの機会を借りて、それを実践してみたい：

ドイツ・ポーランドの国境を画するのがオーデル・ナイセ河であるが、このうちラウジッツ地方のこの河（ラウジッツ・ナイセ河）沿いに位置する、ドイツ最東端の都市がゲーリッツ（Görlitz）である。河幅 50 メートルほどのラウジッツ・ナイセ河を挟んで、ポーランド最西端の都市スコルジェレッツ（Zgorzelec）が対峙している。ポーランドを始め中・東欧諸国がEUに加盟し、大量の低賃金労働力がドイツに押し寄せて来ることが懸念されている。しかし、ゲーリッツ・スコルジェレッツ両市の現状を見る限り、EUがほんとうに一つになっているか疑問に思わざるをえない。

私は昨年夏に始めてゲーリッツを訪れたが、外観上ドイツで最も美しい町の一つではないかと感じられるこの都市で、すぐ目の前に別世界があるのを奇妙な感情を持ってながめた。ゲーリッツの町は美しく、古いドイツが残っているが、それはこの地が経済史上古くより栄えていたこと、また第二次大戦の戦災を免れたことによる。ここは中世以来、スペインからロシアのキエフに至る東西ヨーロッパ横断の交通路（ヴィア・レギア）の要衝であり、さらに北部ドイツからベーメンに至る商業路も通っていたため、商人と手工業者が住み着いた。以前よりここにはソルブ人（スラブ系）が居住していたが、ドイツの教会勢力はこの地のキリスト教化のためにゲーリッツに多くの教会を建立した。商業（穀物と塩の運搬）や織布業で蓄財したドイツ人もここに豪華なルネサンス建造物を建てた。16世紀初頭にはこの町は人口1万人を有し、街道沿いのライバル都市であるエアフルトとブレスラウの間に挟まれ、この地域の最大都市となった。経済的に余裕ができるにつれこの町は人文主義擁護の地として名を馳せた。ドイツ古典哲学の叢生期を代表するヤコブ・ベーメもこの町で生まれた。この地域は歴史上ベーメン（チェコ）との関係が深かったが、その後ザクセン選帝侯国に領有され、ナポレオン戦後のウィーン会議により、シュレージェン（プロイセン）に帰属した。ザクセン領としてはオーバー（上部）ラウジッツと呼ばれ、プロイセン領としてはニーダー（低部）シュレージェンという地域名で呼ばれるためやや混乱するが、それはこの地が地政上重要な位置を占め、諸国の争奪の的であったことを示している。

第二次大戦後、DDR（東ドイツ）とポーランドの国境としてオーダー・ナイセ線（「平和の国境」と呼ばれた）を認知する2国間協定が、ゲーリッツ（河の東側）において1950年6月6日に締結された。旧ゲーリッツはラウジッツ・ナイセ河を挟んで兩岸一帯に広がる都市であったが、この日以降、河の東側はポーランド領スコルジェレッツという新しい都市になったのである。河の東側のゲーリッツ（高級住宅街であった）に住んでいたドイツ人は追放され、もっと東方のポーランド地域から新住民（ポーランド人）が新都市スコルシェレッツに移植された。人工的に二分された両市は目と鼻の距離にあったとはいえ、戦後ずっと疎遠であり続けたようである。ドイツ統一以降、ドイツの都市ゲーリッツが史跡保護指定を受け、街並みが続々とお化粧直しされたため、ポーランドの都市スコルジェレッツの寂れた外観との対照は一層明白になった。ところで、昨年ポーランドがEUに加盟したことで風向きが変わってきた。国境がなくなることはないが、両市は同じヨーロッパに属する都市として新たな提携の模索を始めたのである。街の至る所に、「ニーダー・シュレージェンのヨーロッパ市であるゲーリッツ・スコルジェレッツによろこそ」という看板が目につくようになった。現在の国境検問所のある橋とは別に旧市街地のすぐ脇に新たな橋（写真参照）を架けることにもなった。（建設予算の承認をめぐってスタモンダがあった。）両市の演劇の交流、都市づくりのための行政どおしの情報交換が始まった。そして最重要のプロジェクトは、両市の子供たちによる相互の言葉の習得である。双方から14人の高校生が選ばれ、同じ教室で授業を受けるのである。しかし、ポーランド人子弟はドイツ語の習得に熱心であるのに、ドイツの子供たちはポーランド語の習得を困難に感じ、すぐ止めてしまうという。ポーランドの若者はドイツ語ができれば、ゲーリッツで高賃金の職に就ける可能性があるからである。しかし家庭では、ポーランド人両親はドイツ語が出来ないのが一般的である。両市での生産活動の交流も始まった。例えば、寝具製造の系列企業として、スコルジェレッツの「グビンテクス」社が寝具の製造を、ゲーリッツの「ナイツェクス」社がその販売、流通を担当して、両社で分業体制をとっている。しかしこうした事例はまだ少ない。その理由としてドイツ企業がもつポーランド人への偏見（「車の盗難はポーランド人の仕事」といった類）がある。ポーランドの投資家がゲーリッツで住宅を購入しようとしても物件が出ないという。ポーランドのEU加盟によりドイツとの国境地域は経済交流の可能性がもっとも高いと思われるが事態はそうっていない。ラウジッツ・ナイセ河付近（ドイツ側）にはゲーリッツの他、パウツェン、レーバウ、ツィッタウといった歴史の古い都市やコットブスといった工業都市が散在しているが、これらの都市は東部ドイツでもっとも失業率の高い地域でもある。ゲーリッツの人口も統一前は8万6000人であったが、統一後、若者の流出が続き、現在では6万人に減った。住民の平均年齢は55歳ほどであり、住宅の25%は空き室となっている。他方、スコルジェレッツの人口は3万5000人ほど、平均年齢は35歳と若く、多くの住民

が住宅不足に苦しんでいる。この人口はドイツ統一後増加傾向にある。隣町ゲーリッツの賃金が5倍ほど高く、統一直後の時期にはポーランド人も経済交流を通じ利益を上げることができたからである。今となっては、ポーランド人の若者に魅力的な就業チャンスを与える余力はゲーリッツにはない。

ドイツ・ポーランド間の国境は近くて遠い。それを最も象徴するのがゲーリッツ・スコルジェレツの両市である。この二つの都市を分断するラウジッツ・ナイセ河のほとりに立つと、EUの東方拡大が現実に成果を挙げるにはまだまだ時間がかかると思わざるをえない。



月報 500 号と私……

所員 黒田 彰三

月報が 500 号と言うことは 42 年間継続されていると言うことである。これほど続いたことを誇りに思うとともに、このための原稿の投稿者、編集者、事務局の努力に感謝しなければならない。

小生も事務局員として社研月報に携わったことはある。編集後記も 10 回くらいは書いているかも知れない。しかし自分にとっては最近の研究活動の一環を「資料紹介」の形で載せて貰っているのが喜びである。「経済学論集」や「学会誌」で余り歓迎されない内容を受け容れて下さり、一部の関心のある研究者への情報発信としてのみでなく、講義やゼミ指導の資料として活用できている。月報は「完成稿」でないまだ準備段階であるモノを載せることを基本にしているので、特別批判はされまい。この基本方針は若い研究者には好都合であろう。活用して貰いたい。

最近の小生の社研との関わりは主として「合宿集中特別研究会」への参加と「年報・月報」への投稿である。勉強できることも多いが旅を楽しむことも出来る。一人の気儘な自由旅行も良いが引率されて身を委せてついていくだけの旅も結構楽しい。工場見学や街並み調査も本当に面白い。これに基づいた講義やゼミ指導もしばしばある。この合宿研究会の場所を学部ゼミでも合宿の場所として選んで学生諸君とともに細かく調査したところもある。

そもそも小生が社研と関わりを持つようになったのは、1972 年に助手に採用された時である。当時、指導教授（故江澤譲爾先生）が社研の所長をされていたからである。絶好（？）の事務局員として迎え入れて下さったようである。爾来、30 年以上、除名もされず、強弱はあるが、関わりを持って来た。考え方の違う人との交流もここが中心であった。無論、グループ研究を承認していただいて、有意義な研究を楽しい仲間と送ることもできた。さらには「事務局長」という要職に 4 年間もついて、腕を振るわせて（？）いただいた。感謝の他ない。おかげで充分に年を取り、髪は薄く、お腹（そして面の皮）は分厚くなった。もうこれ以上、何も望むことはない。 合掌

月報 401 号～500 号の総目録と索引

「専修大学社会科学研究所月報目録」

(No. 401, 1996 年 11 月～No. 500, 2005 年 2 月)

1996

No. 401 月報 400 号発刊記念号

No. 402 経済学の諸潮流とその評価の観点について

—塩沢由典氏の批判に答えて— 平井 俊顕・野口 旭・川俣 雅弘

1997

No. 403 武漢・“陶行知研究”国際シンポジウム参加報告 斉藤 秋男

No. 404 石器時代の象徴交換試論 加藤 博文

No. 405 占有資本主義論

—現代資本主義理解のために— 石渡 貞雄

No. 406 唯物史観の「公式化」と現代資本主義 石渡 貞雄

No. 407 アフリカの資本主義への一つの道

—ジンバブウェ・新興黒人大農民についての試論— 吉國 恒雄

No. 408 檀国大学・専修大学共同セミナー 日韓関係の現状と将来

Current Situation and Future Tasks of Korean-Japan Relations

Kang, Tae Hoon (姜 太 勲)

The Basic Conditions for Peaceful Relations between Korea and Japan

hideo Soga

Comment on the Prof. Soga's report

Atushi furukawa

「平和のうちに生存する権利」保障の大切さ—檀国大学・交流訪問記—

古川 純

居心地の良さと悪さと—私の内なる韓国—

木幡 文徳

日本の「罪」と反日感情

樋口 淳

儒教文化の意味

石村 修

竹島（独島）問題の機能的解決に向けて

森川 幸一

No. 409 後決め・事後調整の本質

池本 正純

No. 410 ベトナム企業視察報告

I. ベトナム調査報告

1. ベトナム計画投資省とベトナム共産党

儀我壮一郎

- 2. ベトナム経済開発戦略・小見 内田 弘
- 3. ベトナム経済改革と地域格差問題 福島 義和
- 4. ベトナムにおける「工業化・近代化」をめぐる 加藤幸三郎
- 5. ベトナムの外資法とFCVの概要 大西 勝明

II. ベトナム印象記

- 1. ベトナム旅行で思ったこと 岡田 和秀
- 2. ベトナム企業調査印象記 黒田 彰三
- 3. 1997年3月のベトナム縦断雑記 儀我壮一郎
- 4. ベトナムの人口政策 広瀬 裕子
- 5. ヴェトナムはなぜアメリカに勝ったのか? 三輪 芳郎
- 6. ベトナム印象記－「闇」から「光」へ 井上 裕
- 7. ベトナムの印象 柴田 弘捷
- 8. ベトナム憲法と人間 石村 修
- 9. “ベトナム学”断章 新島 新吾
- 10. ベトナムの労働者像－それをめぐる一、二の所見－ 北川 隆吉

III. 事務局報告

- 1. ベトナム企業視察調査の計画と概要 澤野 徹
- 2. ベトナム企業視察調査を終えて 水川 侑
- No. 411 航空機産業のグローバル競争 溝田 誠吾
- No. 412 <論文>養蚕業＝耕地桑園化と零細耕作農民の動向
～埼玉県榛沢郡高島村正田家史科の分析を中心に～ 高梨 健司
- No. 413 職業教育と資格
－ドイツのデュアル・システムを考える－ 八林 秀一
- No. 414 「小さな」世界企業
－その独自技術の製品・製品技術の絞り込み、海外構想力と経営者－ 溝田 誠吾

1998

- No. 415, 416 [聞き書き] 戦後五十余年と一社会学者
－模索と探求の後－ 吉澤 芳樹
- No. 417 マウル共同体民俗の統合的機能と生産的機能 林 在 海・米地 實
- No. 418 台湾大学・専修大学共同セミナー 台湾と日本の現状と問題
台湾大学法学院とのシンポジウムにあたって 隅野 隆徳

	台湾における日台間の国際結婚の現状と問題点	本間 美穂
	台湾人元日本兵戦死傷補償請求事件にみる日本の戦後補償問題	
	－戦後責任と平和憲法の原理からの考察－	内藤 光博
	憲法から「国籍を」考える	石村 修
	日台間の国籍をめぐる法的諸問題	
	－「在台日僑婦人」の国籍問題を中心に－	森川 幸一
No. 419, 420	シンポジウム－日本の経済改革と規制緩和	
	宮本光晴・鶴田俊正・正村公宏（以上報告および討論）	
	吉岡恆明・望月 宏・吉家清次・松田 修（以上質疑）	
	野口 旭（司会）	
No. 421	<研究会報告> 複雑系とシステム論のパラダイム・シフト	谷本 寛治
No. 422	英語の「タウンプランニング」と日本の「都市計画」	黒田 彰三
No. 423	製造業における最近の変化 －1980年から1995年－	水川 侑
No. 424	消費促進策に関する一考察	青木 信治
No. 425	“ケイパビリティ”で考えてみよう	
	－保守主義・リベラリズム・ケイパビリティ－	作間 逸雄
No. 426	【資料紹介】英国の計画政策差新(Planning Policy Guidance Notes)のなか のグリーンベルト(PPG2)と住宅供給(PPG3)	黒田 彰三
1999		
No. 427	ストックからみた日本経済	松田 修
No. 428	戦後生活研究の再検討 －労働者生活研究の方法論序説（その1）－	玉水 俊哲
No. 429	スコットランドの女伯爵とは誰か	
	－『資本論』原畜章における一人物の同定－	望月 清司
No. 430	北京日本学研究センター・専修大学共同セミナー	
	アジア太平洋の平和と安定 －21世紀の日中関係を展望する－	
	北京日本学研究センター合同研究会と中国社会科学院法学研究所 訪問について	古川 純
	日米安全保障協力の現状と中国	森川 幸一
	日本国の中国に対する戦後補償	石村 修
	日中協力してEUにならってAUへ	周維 宏
	日米防衛協力のための指針と中日関係	王 新生

	中日政治摩擦の構図、原因及びその趨勢	金 熙 徳
	33年目の中国訪問	隅野 隆徳
	意見交換のまとめ	古川 純
No. 431	ニュー・ジラランド再訪・・・長引いたブラック・アウト	森 宏
No. 432	女性学授業におけるセクシュアリティ概念 女性学の新しい方向 ー専修大学総合科目「生の諸相」を題材にー	広瀬 裕子
No. 433	1848/49年革命150周年で祝われたもの	村上 俊介
No. 434	中国華南経済圏視察団報告 中国華南経済圏企業視察を終えて 「華南経済圏進出日本企業の実態調査」の計画と概要 1993年3月の中国華南経済圏の歴史地図 日中経済協力のあるべき姿を考える 中国は普通の国になるかそして、普通の国になったとしたら 阿片戦争について思う 日本国際分業の進展 ーマブチ・モーターの事例ー 日本企業の海外進出状況報告 華南断想：ちぎれ雲 華南経済圏を見て思ったこと 「安価な労働力」と福利厚生費の行方	水川 侑 矢吹 満男 儀我壮一郎 熊野 剛雄 北川 隆吉 加藤幸三郎 大西 勝明 張 浩 川 儀我壮一郎 古川 純 坂本 重雄
No. 435	地域社会の多民族化と「共存」の一位相 ーエスニック・スクールを起点とする都市社会学的実態報告ー	藤原 法子
No. 436	人間の発展としての経済発展	サリム・ラシッド 常行 敏夫
No. 437	バン格拉デッシュと日本 ー専修大学総合科目「世界の中の日本」からの報告ー	サリム・ラシッド 樋口 淳
No. 438	ベルクの「風土」をめぐって	作間 逸雄
2000		
No. 439	「日本人の食糧消費ーコウホート分析」 報 告：森 宏 コメント：松浦利明、渡部重行、田中正光	

- No. 440, 441 生き立ちの記 一次の世代の友へー 加藤幸三郎
- No. 442 養蚕畑作地帯における絹織物・桑園経営の展開
ー埼玉県大里郡新会村正田家を中心にー 高梨 健司
- No. 443 チューリッヒ婚姻裁判所規則とジュネーブ教会裁判所 堀江 洋文
- No. 444 <研究会報告>グローバリズムをめぐる神話と現実
野口 旭、作間 逸雄、石塚 良次
- No. 445 銀行規制と破綻処理スキーム 山中 尚
- No. 446 RECENT LABOR MARKET PERFORMANCE:
COMPARING THE U. S., EUROPE, AND JAPAN
スコット・フュース、浅見 和彦、八林 秀一
- No. 447 内田義彦ーWhat was he? 福島 新吾
- No. 448 岩田規久『ゼロ金利の経済学』を読んで
ー従来のマクロ理論への不満ー 森 宏
- No. 449 北欧の旅 ー第19回国際歴史学会議に参加してー 加藤幸三郎
- No. 450 文化財保護をめぐるナショナリズムとインターナショナリズム
作間 逸雄、作間美智子
- 2001**
- No. 451 栗木安延教授に聞く
聞き手：泉 武夫、内田 弘、兵藤淳史 司会：高橋祐吉
- No. 452 私の半世紀の記録 麻島 昭一
- No. 453 西岡先生に聞く ー貧困調査から医療問題へー 西岡 幸泰
- No. 454 三谷孝編『中国農村変革と家族・村落・国家ー華北農村調査の記録ー』に就いて
宮坂 宏
- No. 455 米国における貯蓄率の低下（≒消費の「過熱」）をめぐる
ーLiterature Review：BPEAを中心にー 森 宏
- No. 456 二瓶敏教授に聞く ー戦後日本資本主義論争の回顧と展望ー
聞き手：矢吹満男（司会）、泉 武夫
- No. 457, 458
北京大学国際関係学院・学術交流会と「日本学者考察大連」 古川 純
春期合宿集中研究会（北京・大連）報告 黒田 彰三
北京大学との合同研究会での報告を終えて 野口 眞
「国家の枠組みを越えるカーアジアにおける研究教育交流展望」 樋口 淳

- 文柳山法律事務所訪問記 矢澤 昇治
 中国の裁判制度と“打官司”－大連市中級人民法院を訪問して 古川 純
 中国視察記 泉 武夫
 中国商用車産業の現況 水川 侑
 キャノンオフィス設備有限公司における「セル生産方式」 丹沢 安治
 ターリエン（大連）市南郊の旧日本人街の再開発事業にみる中国のリアリティ 福島 義和
 21世紀の中国経済研究の諸側面 儀我壯一郎
 「現代化」の壮大な計画と発展 北川 隆吉
 農と食からいま見た中国 松浦 利明
 旅順口近代戦争遺跡と亀井茲明 加藤幸三郎
 30年ぶりの中国 栗木 安延
 2001年3月の北京・大連・旅順 儀我壯一郎
 百聞は一見に如かず 孟 祥 傑
 坂本重雄所員の急逝を悼む 古川 純
- No. 459 花岡事件訴訟和解の歴史的・法的意義
 「花岡事件」戦後補償請求訴訟の和解と研究 古川 純
 花岡事件の周辺 石村 修
 花岡事件和解研究のために 新美 隆
 戦後補償裁判における花岡事件訴訟和解の意義 内藤 光博
- No. 460 THE CRISIS OF INTERNATIONAL RELATIONS THEORY:
 EXPLAINING THE RISE AND FALL OF THE EUROPEAN
 IMPERIAL SYSTEM
 エドワード・コロジョイ
- No. 461 東アジア・太平洋地域の戦略環境と同盟関係 一日豪の比較を中心に－ 佐島 直子
- No. 462 戦前期三井物産の財務部門の機能 麻島 昭一
- 2002**
- No. 463 TRAINING BETTER ECONOMISTS : A note on teaching
 スティーヴン・リム
- No. 464 日本の植民地支配と三・一独立運動（1）－判例の収集と分析－
 開会の挨拶 古川 純、姜求哲、笹川紀勝

- シンポジウム第Ⅰ部－日本側共同研究者の報告
司会 内藤光博
- シンポジウム第Ⅱ部－韓国側共同研究者の報告
司会 林 慶澤
- 閉会の辞 笹川紀勝
- No. 465 日本植民地支配と三・一独立運動（2・完）－判例の収集と分析－
開会の挨拶 古川 純、姜求哲、笹川紀勝
シンポジウム第Ⅰ部－日本側共同研究者の報告
司会 内藤光博
シンポジウム第Ⅱ部－韓国側共同研究者の報告
司会 林 慶澤
閉会の辞 笹川紀勝
- No. 466 昭和戦前期の三井物産財務部門の人的側面 麻島 昭一
- No. 467 IT/グローバリゼーション下の長野県経済
－2001年度夏期実態調査報告にかえて－ 宮寄 晃巨
- No. 468 19世紀フランスの企業内福利制度に関する考察 斎藤 佳史
- No. 469 <定例研究会>アメリカの「アフガン戦争と日本」
報告者 本田雅和
討論者 佐島直子、内藤光博
司会 野口眞
- No.470 ASIANS, AFRICANS AND SECTORAL SPECIALISATION:
THOUGHTS ON THE SECOND KANYA DEBATE
Paul Vandenberg
- No. 471 2001年度春季合宿研究報告会－地域通貨・第三セクター視察－
Ⅰ. 専修大学社会科学研究所 2001年度春季合宿研究会報告 黒田 彰三
Ⅱ. 地域通貨とコミュニティービジネス 内山 哲朗
Ⅲ. 地域通貨をめぐる感想 二瓶 敏
Ⅳ. エコマネーと近江 加藤幸三郎
- No. 472 <定例研究会>古典国際法の時代における日韓の旧条約(1904~1910)
報告者：笹川紀勝
司会者：内藤光博
- No. 473 O. J. シンプソンの「無罪推定」－人種対立と陪審員制度 森 宏

- No. 474 昭和電工の企業再建整備の考察 麻島 昭一
- 2003**
- No. 475 商品の「二要因」論の論理 川崎 誠
- No. 476 Trade Liberalisation and Rural Poverty in asia
Anna Strutt , Steven Lim
- No. 477 <定例研究会>中国行政法の発展と課題
報告者：呂艶濱
司 会：古川 純
- No. 478 体験戦後史 —1945～1947— 福島 新吾
- No. 479 2002 年度夏期合宿集中研究会報告—山形県長井市実態調査—
「日記」と「長井市の分析」 黒田 彰三
現代秋田の産業構造・金融構造の特質—山形県と対比して— 加藤幸三郎
進む産業空洞化、対抗は可能か—山形県調査を中心に— 黒瀬 直宏
「環境型社会」の射程—地域の自立と市場経済— 渡部 重行
野口眞所員追悼文
追悼—野口眞先生— 柴田 弘捷
野口眞所員の逝去を悼む 古川 純
未完の意志 石塚 良次
野口眞さんのこどもぶり 宮寄 晃巨
野口眞さんが遺した物 内田 弘
- No. 480 鉄鋼業における産業組織と再編 水川 侑
- No. 481 Road Congestion Charging in London Devid Foot
- No. 482 雲南省麗江・昆明視察団報告
I. 団長報告
雲南調査と雲南大学学術交流会
—春季海外研究視察団の成果と今後の交流— 古川 純
II. 雲南視察の経緯と概要
2002 年度春期集中海外合宿調査「経過報告」 黒田 彰三
III. 雲南大学学術交流会報告
中国の西部大開発について 張 薦 華
現代日本経済の低迷と経済政策の失敗 田中 隆之
IT/グローバリゼーション下の東アジア経済 宮寄 晃巨

IV. 少数民族問題調査報告		
	中国の少数民族問題の諸側面	儀我壯一郎
	雲南省における少数民族と宗教	北川 隆吉
	雲南省の少数民族について	加藤幸三郎
	雲南省の少数民族について—陸偉東先生の講演にふれて—	古川 純
	(資料) 中国雲南省の少数民族についての話し	陸 偉 東
	雲南省の少数民族政策の印象	鐘ヶ江晴彦
V. 西部大開発問題調査報告		
	再説・「発展」と「落差」と	井上 裕
	昆明国家経済技術開発区視察報告	平尾 光司
	雲南経済開発の過去と現在	内田 弘
	西部大開発問題調査報告	黒田 彰三
	「西部大開発」の背景・現状・問題点	原田 博夫
VI. 雲南印象記および随想		
	中国雲南の旅によせて	松浦 利明
	雲南調査記	殿村 晋一
	雲南紀行	泉 武夫
	雲南雑記	柴田 弘捷
No. 483	「労働の二重性」論の論理	川崎 誠
No. 484	違反行為別交通事故と違反取締りに関する都道府県別比較研究 —平成13年交通事故統計による分析—	真殿 誠志
No. 485	「まちづくり指針」の提案 —Planning Policy Guidance Note 1 (General Policy and Principles)を中心として—	黒田 彰三
No. 486	社会科学としての政治研究—1947～54	福島 新吾
2004		
No. 487	JAPAN'S DE-INDUSTRIALIZATION : Is China a Threat? National Security による「外国人」の権利制限 —イギリス1998年人権法の試練—	Steven Lim 佐藤 潤一
No. 488	私と科学史技術史と専修大学など —私と体験・戦後史—	黒岩 俊郎
No. 489	シンポジウム「野口理論の可能性」特集号 カレツキ・モデルの合意をめぐって	

	－「カレツキ＝野口理論」の可能性とその批判的継承－	栗田 康之
	野口眞氏の間接理論 ー野口・横川論争を中心にー	横川 信治
	「中間理論」の意義と課題 ー野口眞氏の所説をめぐってー	河村 哲二
	野口眞氏の東アジア経済研究	平川 均
No. 490	「簡単な価値形態」の論理（その1）	川崎 誠
No. 491	アメリカの田園都市ラドバーン訪問記	黒田 彰三
No. 492	住民移転の社会的インパクト評価	
	ー中国雲南省昆明市上水道事業の事例ー	施 錦 芳
No. 493	戦前期信託会社に対する大蔵省の監督指導と検査	
	ー虎屋信託会社の事例を中心としてー	麻島 昭一
No. 494	1990年代末以降の中国司法の人的力量の向上	高見 澤磨
No. 495, 496	2003年度合宿研究会報告 夏期：松本・伊那 春期：三重県	
	2003年度専修大学社会科学研究所夏期合宿研究会（松本・伊那）概要	村上 俊介
	南信の思い出	加藤幸三郎
	長野県経済の現状 ー産業集積の特徴とその変容ー	宮寄 晃巨
	2003年度専修大学社会科学研究所春期合宿研究会（三重県）概要	村上 俊介
	ニュージーランドの「改革」と三重県	佐島 直子
	三重県北部の巨大工業・地域開発の意味	
	ー検証のための推論的メモー	北川 隆吉
	企業進出と地域変容ーSHARP 亀山工場の建設・稼働と三重県亀山市ー	柴田 弘捷
	シャープ（株）亀山工場の立地と地方自治体の思惑	福島 義和
	三重の地ビール	水川 侑
	ノリタケ伊勢電子の発展史 ー研究開発型ベンチャー企業の軌跡ー	平尾 光司
	伊勢商人について	平尾 光司
No. 497	竹森俊平『経済論戦は甦る』を読んで	
	ー「デフレとは“物価”下落と同じか？ー	森 宏
No. 498	日本の製鉄技術史と産業遺産	黒岩 俊郎
No. 499	民間航空機産業のグローバル「多層」ネットワーク	溝田 誠吾
No.500	月報 500号発刊記念号	

『専修大学社会科学研究所月報』401号～500号の執筆者索引(50音順)

月報の号数のみ記す。

あ	青木信治	424	ステイヴン・リム	463, 476, 487
	麻島昭一	452, 462, 474, 493	隅野隆徳	418, 430
	浅見和彦	446	そ 曾我英雄	408
	アンナ・ストラット	476	た 高梨健司	412, 442
い	池本正純	409		451
	石塚良次	444, 479		494
	石村修	408, 410, 418, 430, 459		482
	石渡貞雄	405, 406		439
	泉武夫	451, 456, 457, 458, 482		421
	井上裕	410, 482		428
う	内田弘	410, 451, 479, 482		457, 458
	内山哲朗	471	ち 張浩川	434
え	エドワード・コロジョイ	460		482
お	王新生	430	つ 張薦華	482
	大西勝明	410, 434		436
	岡田和秀	410		419, 420
か	加藤幸三郎	410, 434, 440, 441, 449, 457, 458, 471, 479, 482, 495, 496	て デイヴィッド・フット	481
	加藤博文	404	と 殿村晋一	482
	鐘ヶ江晴彦	482	な 内藤光博	418, 459, 464, 469, 472
	川崎誠	475, 483, 490	に 新島新吾	410
	川俣雅弘	402		459
	河村哲二	489		453
	姜求哲	464		471
	姜太勲	408	の 野口旭	402, 419, 420, 444
き	儀我壮一郎	410, 434, 457, 458, 482		457, 458, 469
	北川隆吉	410, 434, 457, 458, 482, 495, 496	は 原田博夫	482
	熊野剛徳	430	ひ 樋口淳	408, 437, 457, 458
く	栗木延	457, 458		451
	栗田康之	489		402
	黒岩俊郎	488, 498		482, 495, 496
	黒瀬直宏	479		489
	黒田彰三	410, 422, 426, 457, 458, 471, 479, 482, 485, 491	ふ 広瀬裕子	410, 432
こ	木幡文徳	408		447, 478, 486
さ	斎藤秋男	403		410, 457, 458, 495, 496
	斎藤佳史	468		435
	坂本重雄	434		408, 430, 434, 457, 458, 459, 464, 477, 479, 482
	作間逸雄	425, 438, 444, 450	ほ ボール・ヴァンデンバーグ	470
	作間美智子	450		443
	笹川紀勝	464, 472		469
	佐島直子	461, 469, 495, 496		418
	佐藤潤一	487	ま 正村公宏	419, 420
	サリム・ラシッド	436, 437		439, 457, 458, 482
	澤野徹	410		419, 420, 427
し	施錦芳	492		484
	柴田弘捷	410, 479, 482, 495, 496	み 水川侑	410, 423, 434, 457, 458, 480, 495, 496
	周維宏	430		411, 414, 499
す	スコット・フェース	446		454
				467, 479, 482, 495, 496
				419, 420

	三輪芳郎	410
む	村上俊介	433, 495, 496
も	孟祥傑	457, 458
	望月清司	429
	望月宏	419, 420
	森川幸一	408, 418, 430
	森川宏	431, 439, 448, 455, 473, 497
や	矢澤昇治	457, 458
	八林秀一	413, 446
	矢吹満男	434, 456
	山中尚	445
よ	横川信治	489
	吉家清次	419, 420
	吉岡恆明	419, 420
	吉國恆雄	407
	吉澤芳樹	415, 416
	米地實	417
り	陸偉東	482
	林慶澤	464
	林在海	417
ろ	呂艶濱	477
わ	渡部重行	439, 479

〈編集後記〉

平成 17 年 2 月号の発刊にあたり、創刊 500 号記念という節目に編集にかかわった者として大変うれしく思います。

創刊が 1963 年の 10 月 1 日ですから、42 年前にもなりますことを考えますと、気が遠くなります。興味深く思い、社研の書庫に入り創刊号を取り出してみますと、創刊号だけコピーでの保存版が 1 冊だけ残っておりました。当時の社研にかかわった先生で現物をお持ちの方がいらっしゃいましたら、ぜひ寄贈して頂ければ幸いです。創刊号の目次をみますと、1. 再発足記念の会 一相馬勝夫学長の挨拶の辞と再発足の経緯を山田盛太郎先生が述べられております。他に〈研究ノート〉で江沢譲爾先生が「工業集積の形態と理論」で書かれております。

社会科学研究所はもともと昭和 24 年の創立だそうですがしばらく休止状態にいたったようで、日本資本主義構造研究会を吸収して発展・解消せしめ、一層広汎な確固たる研究構成と組織をもととする目的であったようです。

当時はむしろ若い研究者グループが起爆剤になっていたことを知るにつけ、現所員の若い先生方にもぜひ奮起して社研活動に参加していただければと切に願うものです (K. M)

神奈川県川崎市多摩区東三田 2 丁目 1 番 1 号 電話 (044)911-1089

妙専修大学社会科学研究所

(発行者) 柴田弘捷

製作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前 2-10-2 電話 (03)3404-2561
